

モロッコ旅行記

モロッコからサハラ砂漠へ

今回は大学院の長期休みについて記したい。日本では学部時代の4年間を「人生の夏休み」と表現する人もいるが、イギリスも似たようなものである。秋から授業が始まり、年末年始は冬休みとして1か月、4月にはイースター休暇で1か月、6月後半から9月後半は3か月間も夏休みとなるからだ(もちろん大学院生に夏休みはなく修士論文の執筆に追われる)。欧州各地やアフリカ大陸へのアクセスが良いこともあり、そんな長期休みは旅行に出かける絶好のタイミング。私も40%のバックパックを背負って大学のキャンパスを抜け出した。

どうしても見てみたい光景があった。アフリカ大陸の3分の1を占める世界最大の砂漠「サハラ砂漠」だ。開発学の分野では、貧困地域の代名詞として「サハラ砂漠以南」という言葉がよく使われるのだが、地図上で示されるだけではどうもピンと来なかった。その光景を記憶に刻むことで、世界の事象に対する自分自身のアンテナが増えると思った。そこで2023年1月上旬の7泊8日で旅行計画を立てることにした。

サハラ砂漠は複数国にまたがっているため、どの国からアクセスするかは自由だ。私が選んだのはモロッコ。アフリカ北部に位置し欧州に近い観光立国として栄えているため、英語での旅行が容易と考えたからだ。学部時代はバックパッカーとして東南アジアや南米を回っていたものの、アフリカ大陸へ足を踏み入れるのは初めてだし、何しろ海外一人旅は10年ぶりだ。よって、ピギナーにやさしい国を選んだ。

サハラ砂漠へのアクセスは容易ではなかった。まずサハラ砂漠に最も近い町に行くためにはアトラス山脈を越えなければならず、どうしてもバスで丸一日かかる。整備された道路とは言え、カーブの多い山道ではバス酔いにも苦しめられた。その一方で、休憩地点ではモロッコで最も美しい村と呼ばれる世界遺産「アイト・ベン・ハッドゥ」や、ロッククライミングの聖地「ト

ドラ渓谷」にも行けたから楽しみもあった。持参したガイドブックを読んで初めて知ったのは、サハラ砂漠はエリアによって名前が違うということ。「サハラ」とはアラビア語で「平坦な砂漠」という意味でしかなく、地元の人々は明確に地名を呼び分けている。私の目的地は「メルズーガ(Merzouga)」と呼ばれる大砂丘。先住民族「ベルベル人」が住んでいる場所から最も近くにあるため、旅人が容易に「サハラ」へ足を踏み入れられる場所だという。

初めての砂漠と乗ラクダ



バスを降りた後、青い空と見渡す限りの砂丘に思わず息を飲んだ。絶景と呼ばれるものは数知れないが、そこにあったのは山でもなく、海でもなく、まぎれもない砂だけの光景だった。だが、感傷に浸る間もなく、ツアーガイドは「まだ先は長い」と観光客を急かしてラクダに乗せた。2時間程かけて、野外キャンプ場へと向かわなければならなかった。

ラクダはめんどくさそうな顔で我々を背中に乗せて立ち上がった。10頭ほどのラクダが列をなして、砂丘を進む。揺れは大きいし、お尻は次第に痛くなるので、乗り心地が良いとは言えないけれど、初めての「乗ラクダ」は良い経験となった。興味深かったのは、前のラクダが尿を出すと、後ろのラクダがその尿を必ず飲ん

でいたことだ。「これぞサステナビリティ」と水の少ない地域に住む彼らの知恵に感心しつつも、その口で私の顔を舐めようとしてくるのは勘弁してほしい。また、さらに驚いたのはスマートフォンで「4G」が繋がったこと。砂漠と言え、人を道に迷わせる代名詞だが、グーグルマップが使えるので誰も道に迷わない。便利さと引き換えに、この世界で「冒険」というようなものは、どんどん失われているように思えた。紙のガイドブックを広げ、タクシー運転手に騙され、それでも目的地に着かなかった10年前の旅の仕方とは、随分変わったのだと寂しさが少し残った。

色彩豊かな「空の青」

最後に、私がメルズーガで最も感動したものを伝えておきたい。それは空の青の豊かさだった。早朝、昼間、夕方と時間帯によって少しずつ空の青の深さが変わるのだ。色彩豊かなモロッコにおいても格別な色。この景色を見ただけで、この場所に来てよかったと思えた。旅の仕方やそのプロセスは変われど、変わらない景色や文化も同時に存在する。記憶に残る30代の海外一人旅となった。

